

菩薩道としての真宗教学

桃 井 信 之

現代真宗教学構築の営為に於ける最も根本的な問題は「現代に生きる我々が、親鸞によって開顯された浄土真宗の仏道に生き、親鸞が到達したのと同質の宗教経験を得るには如何なる宗教的営為が必要なのか」を明すことであると指摘できよう。その際、現代人の思维方法が合理的、科学的になっているという今日の状況の中で、聖教に説示される表現、殊に法蔵菩薩、阿弥陀仏、或は浄土といった超越の範疇に属するものを如何に把握すべきかが不可避的課題となってくる。更に親鸞とは生きた時代（時間）も或は場所（空間）も隔たっていることを考慮しないまま安易に親鸞の「文」当面に教学的主張の根拠を求めても、直ちに親鸞の本意が現代に明らかされることにはなりえないことは言うまでもなからう。

しかし今日までの「教学」は「教義」の概念との混同がある故に、その営為がともすれば訓詁註釈学に陥っていたのかはなからうか。

已に清澤満之の示唆がある如く「教学」は「末学の討究」

なのであって、このことは親鸞の教説が指示する「教義」の解釈によってその開顯された仏道の本質を抽出し、現代に明かすことに外ならない。ならば「たとえ親鸞の問題意識として存在しなくても、表現の背後にある意識の動態（或は構造に眼を向ける）」という姿勢が是非とも必要になってくるのである。

以上の事柄を踏まえて、現代に於ける真宗教学を菩薩道という視点から考究し、成仏道を明かす必要性を主張して、更にその方向性を示そうというのであるが、それは従来の教学（殊に本願寺派教学の主流である空華学派）がその淵源である覚如教学の護教的発想を継承し、親鸞思想の特殊性を強調する余り「別途不共」的な理解をなしてきたことは否めず、そのために親鸞の仏道における、利他行を重視した菩薩道の精神が本質的には不問にされてきたことによる。即ち従来の教学は、その方法論が訓詁註釈学であることから真宗教義の平面的解釈が繰り返されているのであり、加えてその性格が常

に受動的であるために、種々の解釈があっても結局は現生では獲信体験（宗教的覚醒）によって衆生の性は変わらない（主体の根本変革はない）と基本理解がなされているのである。ここに真宗の仏道に於ける生活、実践の原理とも言える菩薩道の精神を看取しようとして試みても抽象的観念論以外有り得ないといえよう。

しかし親鸞はその仏道の骨格を『教行証文類』の「教巻」冒頭に往相・還相の二種回向として示しており、これは自利即利他という大乘菩薩道の根本理念に淵源していることは明瞭である。また親鸞は「浄土真宗は大乘の中の至極なり」と等と語っていることからしても、その仏道は究極の大乘菩薩道を開顯するものと言わねばなるまい。

かような視点を踏まえた「菩薩道としての真宗教学」創造の営為は、従来の教学をトータルに再検討する営みになるものと考ええる。

そこで先ず親鸞の著述に於いて菩薩道的精神が見出される箇所を端的に窺ってみるならば、『愚禿鈔』では、善導の「前念念終 後念即生」の文にそれぞれ「信受本願」「即得往生」と付して、旧き自己に死し新しい自己に再生する意の如く示し、その人を「必定菩薩」と名づけている。

また「信巻」菩提心釈に於ける字釈と『論註』の引文に信心が横の大菩提心であり、それは願作仏心・度衆生心である

と示されるその性格は看過できない。

更に「常行大悲」等を語る現生十益や真仏弟子釈、便同弥勒釈も獲信者を菩薩と称しうる根拠になると考えられる。

そしてこの後の逆謗撰取釈に於ける『涅槃經』の引文によって示された阿闍世の回心は、親鸞がここに獲信者の大乘菩薩道精神を看取しているものと考えられる。即ち「無根の信」を得た阿闍世は、その歡喜による自然の展開として、衆生利益を目的に無量劫の間、阿鼻地獄の苦も厭わない旨を宣言したのであり、これは獲信者は最早浄土往生（『成仏』）を目的としない、即ち大乘菩薩道で語られる「無住処涅槃」という利他実践の根拠を説示していると受け止められよう。

また「証巻」に明かされる還相回向釈は、親鸞の文では浄土往生の後の利他教化地の益と示されており、ここにも「無住処涅槃」という永遠なる菩薩利他精神を窺知することができる。還相回向の理解は従来、来生の益に限定されてきたのであるが、仏道理解を問い直す営為の中でその本質的意義を明かす必要がある。

以上の如く親鸞の著述、思想の上から獲信者が菩薩であることやその仏道が菩薩道であると主張されうることが知られるのである。

無論真宗念仏道を説示した親鸞の生涯は、関東行化や多数の著述を以て「一乗究竟の極説である浄土真宗を大乘至極の

宗教として開顯^③したことが、菩薩道の実践であつたと言ひうるであらう。

また親鸞が「小慈小悲も無き身に有情利益はおもふまじ」等と語り、著述の随所に衆生の虚仮不実性を強調しているものは、信心の内実として重要であることも言を待たない。しかしかような親鸞の文言は、懸命なる利他実践をなした者の深い宗教的自己内省の吐露であり、このことが更にその利他実践行を本質化、純粋化していくものと考えられる。

最後に菩薩道としての真宗教学構築への指針を些か示しておきたい。結論的には、真宗念仏者が菩薩道に生きるという根拠は『大無量寿経』所説の法蔵菩薩に窺知されると考える。已に「法蔵菩薩が親鸞にとつては、大乘菩薩行の究竟的具現者」であり、また親鸞にとつて菩薩觀念の最も根本的意義は、法蔵菩薩の菩薩行と願心そのもののうちに見出され、それは信一念をその場とする衆生救済の事実によつてはじめて真に成就するとの指摘もある。

かような見解な示唆として、真宗念仏者は法蔵菩薩の願いを自らの願いとして菩薩道に生きるという如き、教学的営為による仏道創造の必要性を提唱したのである。そのためには既述の如く、聖教に於ける法蔵菩薩等の超越的表現を如何に解釈していくかが問題となるが、少なくとも親鸞は弥陀・法蔵を実体的には把握しておらず、その文言からは所謂実存

論的解釈とも言うべき営為の一端が窺われるのである。

ならば従来の「数成説」の如き見解の示唆も含め、法蔵菩薩は一々の衆生の機に應じて無限に済度し続けると理解すべきであり、それは「設我得仏：不取正覚」と説示される四十八願全体が、自己の成仏を一切衆生に托したものであることから窺知されよう。そしてその本願の対象たる真宗念仏者が菩薩道を生きるといふのは、親鸞がしばしば語る如く、その実践の根源が弥陀の「本願力回向」にあることによる。即ち二利の精神がその儘表われている「往還二回向」、或はその性格が願作仏心・度衆生心と示される「信心」は、その内実が如来の本願力の働きとしてあることによるからである。

それ故、真宗念仏者が法蔵の願いを自らの願いとして菩薩道に生きることが主張されうるのであり、この概念を基本とした教学構築、仏道の創造が必要であると考えられるものである。

- 1 『定本清沢満之文集』 321頁
- 2 源重浩「教説の論理と実存の論理」：『真宗学』 60号
- 3 幡谷明「親鸞における菩薩道」：日本仏教学会編『菩薩観』
- 4 武田龍精「親鸞における菩薩の概念」：『菩薩観』

△キーワード▽ 教学、菩薩道、法蔵菩薩

（竜谷大学大学院）